
遊戯王GX 竜を従えし来訪者

カンザス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GX 竜を従えし来訪者

【Nコード】

N9595L

【作者名】

カンザス

【あらすじ】

生きていたのに遊戯王の世界に行かされたオリ主 十代達とデュエルをして楽しむのがメインけど時々事件に巻き込まれて・・・

入学

受験番号１１１番ゾロ目

「はあゝ。なんでこうなるかね」

数日前まで生きてたのに口キとか言う奴が

「遊戯王の世界に行つてこい問答無用」

だもんなあゝ。訳分からん上にこのデッキ使つていいのか？

「受験番号１１１番あがるのゝね」

これが生クロノス近くで見るとキモっ（笑）

「では始めるノゝネ。先攻はもらうノゝネ ドロー。トロイホースを召喚二重召喚を発動トロイホースを生け贄にアンティークギアゴレムを召喚。カードを二枚伏せターンエンドナノゝネ」

ドロップアウトボーイに負けるなんてムカつくノゝネ可哀想だけど倒させてもらうノゝネ

「俺のターンドロー。手札の融合を発動。手札の青眼の白竜三体を融合。現れる青眼の究極竜。そして手札の大嵐を発動。二枚の伏せカードを破壊。魔法カード次元突破発動。ライフを3000払いモンスター一体をダイレクトアタック可能にする。青眼の究極竜でダイレクトアタック アルティメットバースト」

会場がざわつく。

「楽しいデュエルでした」

入学（後書き）

オリカ紹介

次元突破

3000ライフを払いモンスター一体を直接攻撃可能にする

十代

「なあお前すんげゝなあ俺遊城十代！ 十代でいいぜ」

「アニキゝ待つてよゝ」

「翔早く来いつて」

目の前には十代に翔何がどうなつてこつなつたんだ

「僕は丸藤翔。翔でいいつす」

「俺は桐島一馬。一馬でいい」

「ところで一馬はなんでブルーアイズ持つてんだ？」

うつそう来たか

「まあペガサスがくれたといつかなんといつか」

「ペガサス会長がつすか」

「そうだけど急になんだよ」

「いいなあゝ」

「言つとくがやらないぞ。俺のは海馬のと違って絵が全然違つんだからな」

「もっとほしくなっ たっす」

「まあいい。翔はいいとして十代はなんでここに来たんだ？」

「お前とデュエルしたいから」

「いいよじゃあするか」

十代とのデュエル

「さあ、十代始めようぜ」

「デュエル」

「俺から行くぜっ！！俺はE HEROクレイマンを守備表示で召喚。カードを一枚伏せてターンエンド！」

「（守備力2000か）俺はホリーフレームを召喚そして魔法力1ド二重召喚発動」

「何っ」

「ホリーフレームを生け贄に青眼の白竜を召喚 クレイマンを攻撃滅びのバーストストリーム」

「クレイマンがっ」

「カードを一枚伏せターンエンド」

「へへっ やっぱお前すげーなあ 俺のターンドロー 来たっ融合を発動 手札のバーストレディとフェザーマンを融合 現れるフレームウイングマン」

攻撃力2100

「それじゃあブルーアイズには勝てないぜ」

「まあ見てなつて フィールド魔法摩天楼―スカイクレイパー―発動 E HEROと名の付いたモンスターはダメージステップの間攻撃力を1000ポイント上げる」

「なっ」

「スカイクレイパーシュート」

「ブルーアイズっ」

LP3900

「まだまだ効果発動破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「何っ ぐああっ」

LP900

「トラップ発動 慈悲の心 このカードは自分が効果ダメージを受けたときそのダメージ以下の攻撃力のモンスターを手札に加える戻ってこいブルーアイズ」

「俺はターン終了だ」

「俺のターンドロ― 手札から強欲な壺を発動 カードを二枚ドロ―」

ニヤツ

「エクスチェンジ発動 互いに手札を一枚交換する」
お互いに手札を交換した

「そして変異融合―メタモルフォーゼ―発動 お互いに手札のモンスターすべてを融合する 俺はスパークマンとブルーアイズを融合」
「俺はバブルマンとブルーアイズを融合」

「さて何がでるかな」

「知らないのかっ!!」

「だって実験だもん」

十代の場には水を纏ったブルーアイズ―馬の場には雷を纏ったブルーアイズが現れた

「成功!!」

「かっこいい!!」

「いくぜ 青眼の雷竜の効果発動 相手のモンスターをすべて破壊破壊したモンスターの攻撃力分のダメージをじぶんが・・・うける？」

L P O

「? ガツチャ楽しいデュエルだったぜ」

「くっそー負けたか」

「一馬あの融合は何だったんだ?」

「あゝあれペガサスにもらったカード 俺にしか使えないらしいさっきのカードちょうだい ペガサスに送って正式にカードにしてもらっから」

「ああ」

「またデュエルしようぜ 十代!!」
「ああいつでもいいぜ」

偽ラブレター

「翔がさらわれた。とにかく早く来てくれ」
「えっ、どこに」

ビュー

十代は走り去ってしまった
えっどこだよ

俺はデッキをもって部屋を飛び出した

ライエローの寮

「違うっ」

ブルー寮

「ここも違うっ」

女子寮

「一馬何してたんだよっ」

十代が怒ってきた

「ほう、どっかの誰かさんがどこに行けばいいかも教えずに飛び出してったんじゃなかったっけ」

「あっ、わり〜」

「まあいい。何で翔が捕まってたんだ」

「のぞきをしたからよ。全くレッドの連中は低俗で困るわ」

「カレンちゃん。だめだよ〜」

「ホントのことですわ。ナナ」

おっとりした雰囲気の子と強気の子が何かはなしている

「お前等レッドが雑魚だとなめんじゃねえ。ならデュエルでどっちが上か決めようぜ」

「いいわよ」

「「デュエル」」

カレン

「俺のターンドロー 俺はワイトを攻撃表示で召喚」

攻撃力300

「雑魚を出してどうするの」

「うるせえ、カードを一枚伏せターンエンド」

「ブルーアイズがないなら怖くはないわ！！ 切り込み隊長を攻撃表示で召喚効果で切り込み隊長を特殊召喚 切り込み隊長で攻撃」

切り込み隊長がワイトに攻撃を仕掛けてくる

「この瞬間トラップ発動 神の加護を発動 このカードはフィールドにレベル1のモンスターしか存在しないとき発動できる。相手の攻撃を無効化し相手のフィールド場のモンスターをすべて破壊する」

「切り込み隊長がっ！！ 私はカードを一枚伏せターンエンド」

「ふんっ、雑魚にも攻撃できないようじゃなあ」

「くっ」

「それといいこと教えてやる。このデッキにはブルーアイズもレベル5以上も入ってない」

「えっ」

「俺は雑魚なんかないってことを証明してみせる 俺のターンドロー いくぜっ融合発動 ワイトと手札のドラゴンゾビを融合 現れるボンドラゴン」

攻撃力1500

「また雑魚を」

「雑魚なんかないっていつてる ボンドラゴンで直接攻撃」

LP2500

「私のターンドロー 不屈闘士レイレイを攻撃表示で召喚」

レイレイは守備表示

「何で!!」

「ボンドラゴンの効果 相手モンスターは守備表示で召喚される」

「くっ ターンエンド」

「ワイト召喚 デーモンの斧をボンドラゴンに装備 ワイトでレイレイに攻撃
ボンドラゴンで直接攻撃」

LP0

「きやあ」

「大丈夫か？」

こけたカレンに手をさしのべる

カレンの手を握り立ち上がらせると

笑顔で

「お前とのデュエル楽しかったぜ」

ボンッ

顔が赤くなる

「どうした？」

「なんでもない／＼／」

「？」

カレン（後書き）

「なんだここ」

フフ後書きコーナーにようこそ

「なにいつてんだ？」

作者だよ

「は？」

ちっ フラグ立ててやらなきゃよかった

「フラグ何の話だ？」

もついい 今回は終了 一馬居残り勉強

「なにを？」

主に作者について

「やだ」

次回 精霊登場です お楽しみに

「ガンスル」

キャラ設定

桐島 一馬

身長170cm 47kg

蒼眼黒髪

顔はイケメンとふつうの間

服装は制服

使うデッキはブルーアイズ

1→4デッキ(仮)

仮なのはまだ切り札がでてないから

本人から一言

「えっ!! えつとよろしく」

つまんねえ

もう次ぎだ次

園崎 カレン

身長155cm たいじゅっ ぐはっ

「ころすわよ」

すいません

金髪紅眼

顔は可愛い

「当然ね」

使うデッキは戦士ビートダウン

????

本人から一言

「どうでもいいけどあんた駄文ね」

うわーんわかってるよ

番外編 平行世界の主人公！？（前書き）

今回は遊戯王GXの風の使い手とのコラボ話 2話連続です。
どうぞ

番外編 平行世界の主人公！？

「おい起きろボケっ」

「ううゝん。後10分」

「ちっ」

男は何かを念じ出す

「うわっくるなあゝお、俺は男だ。油まみれな男に興味はなゝい」

「ククっ」

「はっ、夢か。うゝん」

「やっとお」

「やっとおきたか」

「あっ！！ テメエゝは口キ」

「正解」

「よく覚えてたな」

「忘れるわけないだろ」

「ふん、まあいい。それよりお前と同じ境遇の奴がいるらしい興味はないか」

「ないっ」

「もしかして俺が前言ったことを忘れたのか？」

「問答無用？」

「正解だ」

一馬の足下に魔法陣が現れる。

「てめっ覚えてろ」

「バイバゝイ」

「いててっ」

くっそこはどこだ。見覚えのある景色だな。

「あっ、デュエルアカデミアか!!」

「どうしたんだ。ハネクリボー？」

「十代!!」

「お前何で俺の名前知ってんだ？」

ん？ 何でこんなことを聞いてくるんだ？ あっ、そういつことが

何となくそんな気がしたただけだ」

「ふうん」

「ところで十代より後にデュエルした奴はいるか？」

「俺より後って言うところ刹雪のことか？」

「ああ、そいつそいつ」

「てかお前名前は？ 桐島 一馬だ。よろしく」

「おう、よろしくっ」

レッド寮

「ここが刹雪の部屋だぜ」

「ああ、ありがとな」

「じゃあな」

ドアをノックする

「はいはい、誰ですか」

「あんたが異世界から来た人？」

「なんでそれを？」

「俺もそうだから」

・・・

「ホント神様ってのは理不尽だよなあ」

「だよなあ」

「でどうやって帰ればいいんだ俺」

「さあ」

「試しにデュエルしてみるか」

「いいぜ」

「デュエル」

番外編 平行世界の主人公！？

「俺からいくぜ、ドロー俺は愚かな埋葬を発動 エアースフィアを墓地に送る。そして、俺はシンセサイズスフィアを召喚そして効果でエアースフィアを特殊召喚。エアースフィアの効果で相手は攻撃できない。カードを一枚伏せターンエンド」

俺の手札にはthe アトモスフィアがある。この勝負もらったぜ！！

「俺のターン ドロー 俺はブラッドヴォルスを召喚。カードを二枚伏せターンエンド」

攻1900

「俺のターン ドロー 俺はシンセサイズスフィアを生け贄にバーチャルスフィアを召喚。エアースフィアを攻撃表示に変更し、バーチャルスフィアでブラッドヴォルスに攻撃」

バーチャルスフィアがブラッドヴォルスを破壊する

「くっ、リバースカードオープン リビングデットの呼び声」

ブラッドヴォルスが蘇る。

「ちっ、ターンエンド」

LP3700

「ドロー 俺は仮面竜を召喚 そして魔法カード二重召喚モンスター二体を生け贄に青眼の白龍を召喚 魔法カード滅びの爆裂疾風弾発動 ブルーアイズがあるとき相手のモンスターをすべて破壊」

「なにつ、伏せカードオープンリミットリバース シンセサイズスフィアを墓地から特殊召喚 そして効果でエアースフィアを特殊召喚」

「ターンエンド」

「いくぜ 場の二体と墓地の一体を除外Theアトモスフィアを召喚 このカードは相手の場のモンスターを装備できる」

ブルーアイズが球体に吸い込まれていく

「そして、そのモンスターの攻撃力分攻撃力をあげる」

功4000

「何っ」

「アトモスフィアで直接攻撃」

L P O

「くそ、負けたか」

突然一馬の体が光り出す。

「やっと、帰れるか」

「そうかもうお別れか」

「次はお前がこっちに遊びに来てくれよ」

そういつて一馬はカードを投げる。

「それがあればこっちに來れるはず。ちゃんと返してくれよ」

「ああ、約束する」

「じゃあな」

「またあおう」

「ああ!!」

起きたとき自分の部屋にいた

番外編 平行世界の主人公！？（後書き）

渡したカードは次元突破です。次元を越えまたあおうということ
です。

精霊の話は今日中にかければいいなと思ってます。

精霊登場

「マスター、起きてください」

「zzz」

「マスター」

うーん、誰か呼んでるぞ反応しろよ。うるさくてたまらん

「マスターっ」

「はいっ」

あまりにも大きな声で怒鳴られたので目が覚めてしまった

「うーん」

辺りを見回すと隣に女性が座っていた。

「夢か」

「あっ、マスター」

もしかして俺の事を言ってるのか？

「おれのこと？」

「はい、そうですわ」

「はあ、で何で俺がマスター？」

「あなたが持ち主でしょう。私の」

うーん。目の前の女性は目が青く、肌が白く透き通っていた。もしかして

「青眼の白龍？」

「そうですわ。マスター」

「本当に？」

「はい」

何で女？

「聞きたいことが二つある。まず一つはどっいう事か。二つ目はなぜ女かだ」

「一つ目はマスターの知らない世界があって、そこはカードの精霊たちがいる精霊界と呼ばれる場所です。二つ目に私は雌ですよ。ま

さかマスター気付いていなかったとか？」

「いや、わかってました」

殺気混じりに聞くのですごい勢いで首を縦に振った。

「まあいいです、これからよろしくお願いしますわ」

「よろしく・・・」

名前はなんて言うんだ？」

「名前なんてありませんわ。必要ありませんもの」

「じゃあ俺が決める。ううくん・・・ルーナで」

「いいですわ。私の名前はルーナ」

「ああ、よろしくルーナ」

「よろしく、マスター」

精霊登場（後書き）

もし、こんなキャラを出してほしい。こんな精霊を出してくれ等々ありましたらメッセージをください。使うデッキと文化祭の時の衣装も書いてください。キャラのイメージは崩さないようにしたいので性格も書いてほしいです。

翔君が切れた

「ガツチャ楽しいデュエルだったぜ」

「はあゝまた負けたかあゝ」

「マスター元気出してください」

ああルーナお前ただよ俺を慰めてくれるのは

「あー、お前も精霊見えるのか。こいつはハネクリボー俺の相棒だぜ」

「クリクリ」

「へえゝ、かわいいな」

「本当に美味しそうですね」

ルーナがそう言うのとハネクリボーは十代の後ろに隠れてしまった。

「クリ」

怯えてるところもかわいい

「ハッ、冗談ですわ冗談」

「まあいいや」

そんなことを話していると

「あつ、一馬くゝんアニキ」

「よっ、翔」

「どうしたんだ、翔」

「一馬君クロノス先生が呼んでるっす。早く行った方がいいっすよ」

「え、俺が？」

何かしたっけおれ、ブルー寮に忍び込んでクロノス先生の顔が化粧してないのか見に行ったり、ブルーが何かと絡んでくるからアンティルールで戦ったりしたぐらいだぞ。どれも校則違反じゃないかバレたのかなあゝ

とか思ってたらクロノスにあった

「何か用すか？」

「ナンナノーネ。教師に対してその口のきき方は」

「早く用を言ってくれませんか」

「ぐつ、まあいいのーネ。最近カードを盗まれる生徒がいるらしい
ノーネ。犯人を捕まえてほしいノーネ」

俺じゃねーか。

「イイですよ」

まあ、見つからんと思うがな

「頼むノーネ」

「あつ、一馬君」

「カレンじゃねーか」

最近呼び方と口調が変わりました

「ここだなにしてるの」

「重病患者の相手をしてた」

「だれ「今暇ですか」

「まあな」

「なら一緒にお昼食べませんか」

ああそんなじかんだったな

「じゃあ、十代達も呼んで食おうぜ」

「えっ・・・いいですよ」

「そうか十代達呼んでくる」

「じゃあ、レッド寮に持っていきますわ」

「おう!!」

十代のいる方に走り出す。

「マスター最低です」

「えっ何が？」

「もうイイです」

「？」

十代達と別れたところに着く

「あれ、十代？」

十代達はいなかった

翔君が切れた2

sideカレン

まったく一馬君は鈍感すぎます。まあ、そこがいいところですけどね

あつ、あれは十代さん達と明日香さん。

「明日香さ〜ん」

「カレンどうしたの？」

「一馬君とお昼一緒に食べるんですけど一緒にどうですか？」

「ええ、いいわよ。ところでその一馬は？」

「あつ、さっき十代さん達を探しに行っただんですけど。無駄足だったようですネ」

「そうなのか、じゃあ先に行つてようぜ」

「ふう、仕方がないわね」

sideout

「なんだ十代達いないのか」

レッド寮に行こうとしたそのとき

「カードを出せ」

「何で？」

振り返りながら言う。相手は顔を隠しているが長身で髪が金髪だった。

「何だ。クロノス先生かどうゆうつもりか知らないけど、やめいた方がいいよ」

「うるさいノーネ」

つかみかかってきたのでその手を払いのけ腹に拳を当てる。

「やっぱクロノス先生か」

「グググ」

「あんま調子乗つてると切れますよ」

「うるさいノーネ。教師に手を挙げたから退学なノーネ」
「もしやったら、このテープを校長に渡しますよ」
「教師を脅迫するつもりなノーネ」
「まあそういうことになりますね」
「わかったノーネ」
「そうですか、さようなら」
レッド寮に着いたら十代達がいた
「あつてめえくらいいつ来たんだよ」
「いやあ途中でカレンに会ってさあ」
「まあいいや食おうぜ」
「さあ召し上がれ」
カレンが料理を机に並べる
「おいしそうっす」
「うまそうだなあ」
「ほんとうね」
「・・・」
「いったきまっす」
十代達は料理に手を伸ばす
「うんめえ」
「おいしいっす、あれ？一馬君は食べないの」
一馬だけ一向に箸が進まない
「ああ、おれは洋食が嫌いだな。ドローパンとかなら食べるかな」
「そうでしたか・・・」
「いやカレンの料理が食べないとかじゃなくてな」
「一馬く〜ん」
「あなたねえ」
上から翔、明日香の順だ
「何でおまえ等が怒る？」
「とにかくでていけ」
「はっはい」

うわ〜ん、何で俺が〜

side カレン

一馬君が洋食嫌いだったとは、次からは和食を
そう決意していた

side out

「くそ〜」

「マスターが悪いです」

「ルーナ何とかしてくれよ〜」

「知りません」

「そんな〜」

この日は野宿することになった。その日ほど自己嫌悪した日はない。

月一試験 最近何かと絡まれます

「十代っ、これを使え」

「サンキュー」

「来たぞっ、あと一発でいいはずだ」

「落とし穴、じゅんびOK」

「よし、はまった。これがとどめの大樽爆弾Gだ」

ドカーン

「狩ったのか？」

「ああ、十代。俺たちの勝ちだ」

「やっと、ナルガ二匹倒せたな」

「ああ、やっと天鱗が手にはいる」

プチッ

「NOoooooooooooo」

「この大事なときに、モ。ハンなんてやってる報いっす」

「だって翔君が勉強を覚えておきながら、まちがってやる気ななくしたからやってるんだぜ」

「そうだぜっ翔」

「一馬君は良いとしてアニキは最初からやる気なかったっす」

「もういい、十代明日香にでも教えてもらいに行けば？」

「ならおまえはカレンに教えてもらいにいかね？」

「うるさいな」大体実技だけで良いじゃないか。何を血迷ってこんなことしなくちゃいけないんだ。もういい俺はねる」

十代達の部屋を出る

「ふうやっぱ部屋は落ち着くな」あつ、そうだ充電をしとかなくは」

そう重い充電器を探す

「ないっ、それどころか俺のゲームが全てない」

「一馬君明日試験なのにゲームはないと思うな」

「はっおまえはカレンとだれっ？」

振り返るとそこにはカレンと小さくて髪の白い女の子がいた

「ナナですよ 会ってませんでしたっけ」

「いいえ 全然」

「あなたとカレンはどうゆう関係？」

「もちろん恋「友達だぜっなあ」

「そう・・・ですね」
うつむくカレン

「「ここからだ何か女の子の音がする」」

「おいっ、とりあえず隠れろ」

「一馬君まさか女の子連れ込んでないよね」

「ああ、もちろん」

完璧な演技おれの将来役者に決定

「そうっすか、コレ一馬君宛だったすよ」

渡されたのは小包

「なんだこれ？」

そう振り向いた瞬間殴られて気絶してしまった

月一試験 何でみんなデュエルしない？

起きたとき木に縛られていた

周りには誰もいない

「ええええ」

「ナンナノーネ。まったくうるさいノーネ」

「クロノス教諭」

「見なかったことにするノーネ」

どこかに行ってしまったorz

朝になりました

誰も助けに来ません

「ブルーアイズ何とかできないか？」

「無理ですマスター」

使う気なかったんでけどな

パラパッパパー 盗賊の七つ道具

「はっはっは 積みめが甘かったな」

ナイフがない何で？なんで？あつそっかなんかとられてたな入学当

初に

「甘いヤスリがあれば何とか逃げれるさ」

ポトツ

orz

「一馬君ここにいたの」

おお神が降臨したいや女神が降臨した

「お願いします。何でもしますから助けてください」

土下座気持ちだけ土下座

「いいですよ。そのかわりつきあってください」

「べつにいいよ」

「ほんとうですかっ」

「別に付き合ってるやついる訳じゃあるまいし」

カレンが走り去った

「何でそうなるかな？」

月一試験 新たなる力

「一馬君いまほどくね」

「ああ、さつき逃げたときはどうなるかと思っただぜ」

「うう、あのときはちょっと」

「まあいいや。ほどきにきてくれたし」

「あとコレ落ちてたよ」

「ああ届け物か。ところで何で俺はこんなことに？」

「ああ、結局私たち見つかったちゃってそれで一馬許すべからずとかいって一馬君をたたくのをみたけど」

「そうか俺はそんなことでまあいいとしてこれはなんなんだ？」

「さあ？」

「まあいい開けてみよう」

中には見たことないカードがあつた

「なんだこれ」

ペガサスかな送ってきたの

「まあいい試験が始まる」

アカデミア

「翔君なんでもきのうあんなことしたのかな」

「かずまくん!!」

「何で驚いてるのかな？ まあいいや実技で君を指名するからよろしく」

そして筆記では英語以外壊滅的になり乙

「翔早く来いよ」

「デュエル」

「俺のターンドロー 白龍の雛 このカードをリリースすることで
ブルーアイズを特殊召喚 カードを二
枚伏せターンエンド」

「僕のターンドロー ジャイロイドを召喚そして「罨発動属性付与
このカードは手札のモンスター一体

を墓地に送ることでもンスターの属性を捨てたモンスターの属性に
変えることができる 俺はカードを狩る死神を捨てる そしてもう
一枚罨を発動 変異 このカードは相手のターンに特殊召喚をする
ことができる 現れる破壊の限りを尽くす龍 青眼の滅龍を召喚
そして効果発動 このカード以外のモンスターを全て破壊そして破
壊されたモンスターの持ち主は一体につき500のダメージを受け

る」

「くっターンエンド」

翔LP3500

「俺は青眼の滅龍で直接攻撃」

LP500

「そして青眼の滅龍の効果発動 このカードが攻撃したときお互いのLPを500削る」

LP0

反則に近いカードだな。闇だからこれからは使わないようにしよう。
おもしろくないし

「一馬君」

「何か用か」

「あの、その」

「何」

「やっぱりいいです」

「なんなんだ？」

月一試験 コレが私の実力です

「やっと終わったぜ。次はお前の番だなカレン」

「あっ、うん」

「どうした緊張してるのか？」

「そんなことないって」

「十代何でお前が答えるんだ」

「だってカレンはつよいんだぜ。まけるわけないじゃないかなっカレン」

「ええ十代君の言うとうりです。私が負けるわけない」

「だよなっ、カレン」

「ああ、そうかもな。まったく十代はまあいいカレンお前の番みただぜ」

「うん」

そう言うとかレンはデュエルディスクにデッキをセットする

「がんばってこいよ〜カレン」

「いってこいカレン」

「はい」

「ふふ、君みたいな可愛い子が相手とはね。どうだい君デュエルに僕が勝ったら付き合うつて言うのは」

「な、わたしにはもう付き合っている人がいます」

「へえゝなあ一馬知ってたか？」

「ああ、まあな」

「誰のことだなあなあゝ」

「カレンが言うだろそれは」

「誰だい君みたいな子と付き合っている奴は」

「それは一馬君です」

「「ええええゝ」」

「そうだったのか一馬」

「ああ」

「何で教えてくれないんだよゝ」

「まあいいじゃないか」

「ふん、あんな冴えない奴に君はふさわしくない。このデュエルにかつて君は僕と付き合っただ」

「いやです。それにあなたみたいな人が私に勝てるとは思わない」

「そうかじゃあ始めよう」

「デュエル」

「僕の先行だ。ドロー 僕はビッグシールドガードナーを守備表示で召喚 カードを二枚伏せターンエンド」

巨大な盾を持った戦士が現れる

守備力2600

「私のターン ドロー 私はアックスレイダーを召喚そして手札から守備封じを発動 これでビッグシールドガードナーは攻撃表示にアックスレイダーでビッグシールドガードナーに攻撃」

LP2100

「ぐっ」

「カードを一枚伏せターンエンド」

「やるね 僕のターンドロー 僕は暗黒界の騎士スールを召喚 スールでアックスレイダーに攻撃」

「速攻魔法突進を発動 これで攻撃力を700アップ」

LP1500

「くっターンエンド」

「これでとどめです アックスレイダーで直接攻撃」

LP200

「ありがとうございました」

月一試験 コレが私の実力です（後書き）

だれか僕にキャラの案をください。お願いします

試験が終わったと思ったら事件

「はあ、やっと終わったか」

「そうだね」

「カレンお前はすごいな。アックスレイダーで勝てるなんて」

「そんなことないよ。ただ相手が弱かったただけだし」

「ふん。そっかでカレンは何をするんだこれから？」

「私は寮に帰るけど一馬君は？」

「俺は十代とデュエルでもするか」

「そう、じゃあね」

「ああ、じゃあな」

レッド寮

「んっ手紙が届いてる」

中身を見ると

「お兄ちゃんに会いに行くからね」

「まじか」

ドアがノックされる

「お兄ちゃん。来たよ」

「ああ今開ける」

「久しぶりだね。お兄ちゃん」

「その言い方はやめてくれ。実の兄じゃないんだからな」

「やだ」

「まあいいとして体は大丈夫なのか？」

「うん。お兄ちゃんがここに来てから治ったんだ」

「そうか、桜」

桜とはこの世界に来てから初めてあった。飛ばされて行き着いた先がこの世界の病院。しかも桜の入院してた部屋で見られたが桜は特に気にしてはいなかった。

「何でここに来たんだ？」

「お兄ちゃんと同じところに通うため」

「無理だろ。おまえはまだ高校生ですらないのに」

「でも、入ったよ。中等部だからレッド寮だけど」

「わかったよ。で部屋はどこなんだ」

「もちろんココだけど」

「なんで、こんなに事件に巻き込まれるんだ」

祝ユニーク一萬突破 PV45000突破（前書き）

いやゝまさかここまで文才のない作者に付き合ってくれるとは、感激ですそんなわけで今日は一馬君の桜との出会いを書きたいと思います。

どうぞゝ

祝ユニーク一萬突破 PV45000突破

「問答無用」

「うわぁ」

どすんっ

オット今ので軽く骨が・・・

「折れてない」

これは某オカマさんのネタですね。はい

「はっ、俺は何をしていたんだ」

「あの」

「はい？」

「あなた誰？」

おちつけっ素数を数えるんだ。1、2、3、4、

4は素数じゃないっ

「大丈夫？」

「もちおん」

あゝもつだめだ落ち着けない。もちおんってなんだよ

「はぁ　ところで何でここにいるの？」

「ここって？」

「病院だよ。見た感じ怪我もしてないようだし、まあ頭の方なら可能性はあるけどね」

状況を整理しよう、目の前にはベッドに座った女の子が一人。その子は桜色の髪の毛をしていて性格は少し直球すぎるところがあるけど顔立ちは整っている。華奢な体だし病気なのかな？

いや当然だと突っ込みのあなたそのとおりです

「本当に大丈夫？」

「ああ、もちろんだ」

「よかった。あなたアツチ系の人じゃないかと心配だったけど普通

の人みたいね」

アッチってどっち

「まあね」

「君は病気なの？」

「・・・」

やばいイキナリすぎた

「いや、答えたくないなら別に良いけど」

「わたしね、治らない病気なんだ」

「えっ」

「だからねお父さんもお母さんもいつつも自分を攻めてるの。私のせいで」

（おい）

（あつ、てめえ送るならちゃんと送れよ）

（何を言っちゃんと送ったじゃないかフラグの立つ場所に）

（おまえ、ギャルゲーのやりすぎじゃないか？）

（なんだと、まあいいその子の病気は治るから心配するな。頑張

れ)

(てめえ)

返事はない

「大丈夫君の病気は治るさ」

「無理だよ。そういつてたから」

涙目でこっちを見るのはやめてください。俺が泣かせたも同然なので心が痛いです。

「絶対治る。俺が保証する」

「うんっ」

それからしばらく桜と一緒に過ごしていると桜の治療法が見つかり、桜を残し俺はデュエルアカデミアへ

祝ユニーク一萬突破 PV45000突破（後書き）

狙われたみんな俺は誰を守る？

「ぐあああ」

「また一人奴の悲しむ顔が目につく」

「最近デュエルでまけると倒れるという事件が起きている。くれぐれも一人で出歩かないようにしてどうしても出歩くときは他の誰かと一緒に行くように」

「なあ、一馬あゝ」

「なんだ十代」

「ドローパン買いに行こうぜ」

「いいぜ。話長いからな」

コソコソ

「トメさんにセイコさんドローパンちょうだい」

「あれ、授業は？」

「なんか変な話しかしてなくて抜け出してきた」

「ふん」

「一馬どっちが黄金の卵パンを当てられるか勝負だ」

「ああ、いいぜ」

「ドロー」

パクッ

「ちえ俺はハンバーグパン一馬は？」

十代が一馬の方を見ると一馬の口から血が出ている

「おい！ 一馬どうしたんだ」

「一馬君」

「おや、どうしたんだいっ」

「カミソリが入ってた」

口の中軽く切っただけだけど下手すりゃ死ぬぜ

「誰だかしらねえけど調子乗りやがって」

誰がいつたい何のために？

「十代俺は寮に帰るお前は？」

「俺も一緒に帰るぜ お前が心配だしな」

「じゃあ帰ろうぜ」

「今度は誰にしようか？ 一馬あ」

「マスター 大丈夫ですか？」

「ああ、それよりお前はどこに行ってたんだ？ 全然見なかったけど」

「少し里帰りを」

「ふん」

「きゃああああ」

「これでまた奴は」

「お兄ちゃん!!」

血相を変えて部屋に来た桜

「どうした」

「カレンちゃんが」

「何があつた!!」

「デュエルして負けちゃったら倒れて」

「そいつがどんな奴かわかったか？」

「顔は見れなかったから」

「そうか」

（おい）

（なんだよ）

（思った以上に早かったから伝えるが

お前の命はもうない）

（何言っただよ！！ 俺はまだ死んでないんだろ！！）

（それは俺が記憶を書き換えたからだ）

（そんな）

絶望に打ちひしがれている中

（あと一回本気でデュエルしたらお前は消える）

（たった一回）

（もっと短いかもしれん。それだけだ）

そういつて消える

「お兄ちゃん？」

「ああ、大丈夫だ。おまえは帰れるか？」

「うん、大丈夫」

「そうか一人だと危険だ。十代と翔に付いていってもらえ」

「わかった」

桜は出ていった

「くそっ！！なんで俺ばかり」

「そうだ、その顔最高だ」

「誰だ！！」

「俺はお前が苦しむ顔を好むものだもつと苦しめさっきの桜とか言
ったかもつやられてるぜ、俺の手で　なあ

ヒヤハハハハッハハ

最高だその面もつと苦しめさあ外に出て、見ろお前以外ここでは
もう立っていない」

「嘘だ！！」

「なら見て見る」

外に駆け出す

すぐ近くに桜や翔そしてレッド生が大勢倒れている

「さあ、デュエルだ。お前と俺勝った方がこの大勢の命の選択ができる。」

つまり生きるか死ぬかの勝負だ」

「一馬!!」

「十代!!」

「まだいやがったか」

「十代・・・」

お前がいたおかげで俺は一人じゃないことがわかった
ありがとなっ」

「おうっ」

「さあやろっぜ」

「その顔じゃない俺が好きなのはお前の苦しむ顔そんな顔ではない
!!!」

「知るかつ」

「デュエル」

狙われたみんな俺は誰を守る？（後書き）

ラストデュエル みんなを助けてみせる

「ヒヤハハ俺からだあゝ ドロー 俺は絶望への階段を発動 お前は二枚ドローができる そしてエンドフェイズにそのカードを捨てるうゝ そして忠実なる下僕 ドギー を召喚」

絶望への階段 オリカ

相手はドローフェイズ二枚のカードをドローする
そのカードが手札にある場合エンドフェイズに捨てる

忠実なる奴隷 ドギー オリカ

攻撃力1600 守備力0 星3

このカードのコントロールは相手に移らない

「カードを一枚伏せターンエンドおゝ」

変態

手札3枚

ドギー

絶望へ 伏せ×1

「俺のターン ドロー 俺は大嵐を発動」

「ヒヤハハ」

「そしてブラッドヴォルスを召喚 バトル ブラッドヴォルスでドギーを攻撃」

「ヒヤハハハハ」

LP3700

「カードを一枚伏せ ターンエンド」

一馬

手札4枚

ブラッドヴォルス

伏せ×1

「ヒヤハハ ドロー 俺は降臨門 エクシード を発動 そしてこの時お前の場のモンスターをいただく」

「なに！？」

おぞましい門ができ、そこにブラッドヴォルスが吸い込まれていくそして4とかかれた鍵になる

降臨門 エクシード オリカ

お互いの場と手札そして墓地からレベル五以下のモンスターを除外する

そして全ての鍵がそろったときエクシードを特殊召喚する

「墓地からドギーを除外そして手札からワイト ジャツカルの霊騎士 黒魔道師クランを除外」

四枚のカード全てが鍵になり、鍵穴に入っていく

ゆっくりと門が開く

そしてその奥から巨大な化け物が現れる

「降臨せよエクシード」

エクシード オリカ

攻撃力3000 守備力3000

このモンスター以外自分は召喚できない

このモンスターがフィールドから離れたときお互いは負ける

「ブルーアイズと一緒にだ」と

「そんなくずと一緒にするな、もしこのカードがフィールドから離れたらお互い負けつまり引き分けに

なっちまうんだよぉ、そうなると全員衰弱して死んじまうなぁ」

「くっ」

「俺はターンエンドだ」

「俺のターン ドロー」

引いたカードは青眼の白龍 手札には属性付与に進化と強制除外
そして平行世界融合

（クルックー）

（おい、エアースフィア何してんだ？）

「っそうか俺にはまだ仲間がいる。俺は手札から強制除外青眼の白

龍を除外」

「ヒヤハハやつとあきらめたか」

「そして平行世界融合発動」

（頼む答えてくれ）

（クルツクー）

（えっここに the アトモスフィアを掲げる？

こうか？）

「ありがとう刹雪」

カードが輝き出す

「俺はブルーアイズウイングドラゴンを融合召喚」

「カッコイ」

「そして前のターン伏せておいた強欲な瓶を発動」

目をつむりながら一枚ドロースる

「来たっ、俺がついてるのかお前がついてないのかしらないけど俺の勝ちだ」

強欲な壺発動二枚ドロー

そしてブースタートラップこれで俺は手札からトラップカードを発動できる」

「ヒヤハハだからどうした」

「属性付与 俺はシャインエンジェルを墓地に送り光属性付与」

「属性なんてかえてどうする」

「進化 発動 二度の変化を経てブルーアイズは神となる

現れる青眼の神龍このカードの効果はモンスターが存在する限り攻撃を続ける」

「そうかそれでどうするんだ」

青眼の神龍攻撃力4000

エクシード攻撃力3000

「もう一つ効果がある 神とつくカードを呼び寄せるんだ

そして神の慈悲発動 このカードの効果で相手モンスターは破壊されないつまり俺の勝ちだぜ」

変態LPO

「やっと終わった」

一馬の体が光に包まれていく

「一馬!!」

「悪い、後のことは頼んだ」

そついうと一馬の体が消える

「かずまああ」

（はあ、本当に死んじゃったんだな）

（お前はもっと向こうにいたかったか？）

（当然だろ!! 十代と友達になってやっと楽しくなってきたよ）

（向こうで十代とやらが三年生になったら戻してやれる）

（本当か？）

（嘘はいわん。本当は少し時間をおいてから転生するべきだった）

(いや、いいよ俺はここで待つ。向こうに戻るまで)

アカデミアではカレン、桜、十代が泣いていた

「十代」

「一馬？」

「えっ」

「どこにもいないよ」

「いやたしかに」

「俺は三年生になったら帰るから待っててくれよ」

「ああ」

「なに？」

「三年生になったら帰ってくるってね」

ラストデュエル みんなを助けてみせる（後書き）

第一部完結です。話は飛んで三年生だいたいヨハンがくるのと同じぐらいに帰らせるつもりです。カンザスでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9595/>

遊戯王GX 竜を従えし来訪者

2010年10月10日18時52分発行